

先人の知恵から

41

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

ここまで続けていると同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返ることも増えた。

今回も「夕行から」以下の7つ。

- 他人の飯を食わねば親の恩は知れぬ
- 頼み難きはは人心がた ひとこころ
- たまに出る子は風に会う
- 玉を攻おさむるに石を以てす
- 便りの無いのは良い便り
- 足るを知る者は富む
- 断機たんきの戒め

<他人の飯を食わねば親の恩は知れぬ>

親元を離れ、他人の間で生活して苦勞をしないと、親のありがたさがわからないということ。

言うまでもないことかもしれないが、親のありがたさというのは離れてみて初めて

分かるものだ。当たり前、身の回りの世話をしてくれて、何よりも大事にしてくれる親は、思春期になると、鬱陶しい存在になる。最近は過干渉の親も多いので猶更であろう。しかし、いざ、一人で暮らしてみると、お米の炊き方から、電球の替え方まで、何も知らない自分に気づく。

世の中には、親切な他人も多い。困った時に助けてくれる人が居ればよいが、いない時、やはり頼りになるのは親だろう。今はLINEなど、便利なツールがあるので、困ったらすぐ話すことも写真を撮って確認することもできる。或いは、オンラインにしておいて、指示を仰ぐこともできる。そうになると他人に頼ることが減ってしまうかもしれない。その点は不安ではあるが、とりあえず、実家から離れて暮らすことで、学べることは多いだろう。

同時に、日本から離れて外国で暮らしてみるのも、視野を広げ、人間としての成長を促すうえで役に立つ。

残念ながら、家から離れたくないという人が多くなった。就職しても家にいる。親も給料が安いからと家に置く。いつまでも親に甘えているようでは、親のありがたさに気づくことも、自立することも難しくなるのではないか。

住み慣れたところに居座ろうとせず、見知らぬところに飛び込んで、新しい体験をすることの素晴らしさを、もっと若い人には知ってほしい。そんなことから、子どもたちにこんな諺を伝えている。

<頼み難きは人心>

人の心は変わりやすく、頼りにならないものだということ。

「女心と秋の空」という言葉があるが、人の心というのは、女性だろうが男性だろうが、変わりやすい。昨日はこう言っていたのに、今日は違うことを言うなどというのもよくあることだ。子どもに、人を信じるなどは言いたくはない。しかし、人を信じれば裏切られることもある。人を頼ることも一緒だ。できることは自分でやるべき。人に頼って、思ったとおりにしてもらえなくてもあきらめられるか。それなら人に頼っても問題ないが、頼ったことで思った通りの結果にならず、頼った人に対して怒りを感じるというのなら、最初から頼まない方がよい。人に頼むということはそういうことなのだ、子どもたちには知ってほしい。

<たまに出る子は風に会う>

普段はしないようなことをたまにすると、

失敗したり不運に出会ったりするというたとえ。いつもは家に引きこもってばかりいる子どもがたまに外に出るとその日に限って大風が吹くという意から。

慣れない事はしないのが一番、普段どおりが一番平和である。いつもはこんなことしないのに、たまに違うやり方、違うことをしてみたら、それが大失敗や、さらに大変なことを巻き起こしたなどという経験がある方も多いだろう。

車の運転でも、こっちの方が速いかもと、いつもと違う道を行っただために、かえって迷って時間がかかり過ぎてしまったということもある。

ずっと引きこもっていた子が、急に外に出ると、いつもと違うことをしているわけで、そういう時に限って、何か悪いことが起こり、折角外に出られたのにまた引きこもってしまうということが起こる。不登校で引きこもっていた子には、たまに出るとうまくいかないことも起こると伝えておくのも、一つの方法である。前もって起こるかもしれないことを伝えておくことで、実際に起こったときに慌てないように。そして、それに負けず、次にも繋がるように、こんな諺を使うことがある。

<玉を^{おきむ}攻るに石を以てす>

つまらないものでも、それを使って立派なものを作り上げることが出来るというたとえ。また、物にはそれぞれの役割があって、一つとして必要でないものは無いということのたとえ。玉を磨き上げるのには、普通の石を砥石に使うことから。

出典 後漢書

子どもたちは、結構自己評価が低い。そんな子のためにこの諺を使う。

「自分なんて・・・」という子は、自分より優れた子を見て比較し、自己評価をさらに下げる。そんな子に、この諺を言う前に、ドラえもんの話をする。ドラえもんは、大量生産の猫型ロボットのひとつだが、ドラミちゃんと兄妹で、二人に使ったオイルが古くて、上澄みが薄く、下に濃いものが沈殿していた。ドラミちゃんは下に沈んでいた濃いオイルを使い、ドラえもんは上の方の薄いオイルを使ったから、ドラミちゃんは優秀に、ドラえもんは若干出来損ないになった。しかし、ドラえもんが優秀なロボットだったら、話はちっとも面白くないものになっていただろう。

小学校などでいじめについての話をするときも、ドラえもんの話を出す。みんなが同じ猫型ロボットだったら、どの子がどの子か区別がつかない。でもドラえもんは耳がなく、青いからすぐ区別がつく。のび太君にしても、勉強は出来ないし、運動も苦手だけど、優しいし、あやとりと早撃ち、昼寝が得意だ。映画でも、普段はいじめっ子のジャイアンだって、のび太の良い面を認める。どんな子にも、何かしら良いところがあり、一人一人、がとても大事なのだという話をする。

大きな石、小さな石、でこぼこの石、丸っこい石、いろいろな石があって、それらがぶつかり合ったり、一つの石を磨くのに別の石が使われたりと、それぞれに役割がある。そんな意味のこの諺が、子どもに伝わってくれることを祈って。

<便りの無いのは良い便り>

何も便りが無いというのは、知らせるような変わったことが無いからで、相手が無事に過ごしている証拠であるということ。音信がしばらく無いからといって、それほど心配することはないということ。

子どもたちや母親たちは、LINEでのやり取りで連絡を取っている。LINEがすぐ既読にならないとイライラする子がいるし、それを知って、届いたらすぐ見て返信しなくちゃならないと強迫的にやっている子もいる。母親たちも、しばらく返信がないと、もうあれこれ詮索し、グループから抜きたいのではと考える。

大学で遠くに行った娘や息子に対しても、毎日LINEをしろとか、電話をしろとか、強制する母親がいる。

子どもたちは、仲間外れにされる、いじめられるからと必死に返信を打っている。いじめられないように、仲間外れにされないようにするのが、子どもたちの第一の仕事なのだ。そんなに気を遣わなければならぬ友達や友人は友達ではないといくら言っても、彼女たちはやはりすぐに返信することに拘る。だからこそ、小中学生にスマホを持たせるのに反対なのだ。そんなことにばかりに気を配っていないで、もっと外に目を向けてほしいから。

一方、母親たちには効果がある。「かわいい子には旅をさせよ」という諺も使いつつ、子どもと距離を取り、子どもの自立を促すようにと伝えている。その話に、母親たちは納得してくれることが多い。親離れが大事なと同様に、子離れもしなければならぬ

い。

子どもも親が高齢になると、心配してそばに住んだり、毎日様子を聞いたりしている。また、親子関係が悪い場合など、毎日様子を確認しなくちゃいけないのが負担という場合もある。そういう時も便りが毎日あると、無い時に気になってしまうものだから、大事な時、必要な時だけ便りをするほうが良いのではと伝える。

最近は無線通信機付きの電気ポットや監視カメラなど、遠方に住んでいる親の様子を確認できる方法がいろいろ出来てきた。便りだけに頼ることは無いのだ。

英語では・・・

No news is good news. (知らせがないのは良い知らせである)

<足るを知る者は富む>

満足することを知っている者は、たとえ貧しくても精神的には富んで豊かであるということ。

出典には「足るを知る者は富み、務めて行うものは志有り (満足することを知っている者は富者であると言えるし、努力して道を行おうとするものは志あるものといえる)」とある。

出典 老子

「足るを知る」ことはとても大切だと思う。というのも、今は物が溢れ、おいしいものを食べ、毎日風呂に入り、もっとおいしいものを、もっと良いものをと欲に限りがないからだ。

動物は必要なだけしか獲物を捕らない。

リスなどは貯めておくということをするが、一般的には必要な量の食べ物を捕る。しかし、人間は、あれもこれもため込む。不安を煽るようなニュースが流れれば、トイレットロールを何パックも買おうとする。

エネルギーでもなんでも、人は使いすぎる。暖房でも冷房でも、ずっと慣れてくると、もっと暖かく、もっと涼しくと温度をあげたり下げたりしてしまう。それと同時に我慢が出来なくなる。こうしたことは限界がない。

資源には限りがある。この地球だっていつまでも青い美しいままではないだろう。今こそ、だれもが「足るを知る」ことが出来れば、無駄にエネルギーを使ったり、無駄にものを買って捨てたりということもなくなり、もっともっと物を大事にするだろう。それが子どもたちの未来につながる。

子どもたちにそれを伝えるには大人から見本を見せねばならない。きっと「足るを知る」と心が本当に豊かになるだろう。

英語では・・・

Content is the philosopher's stone, that turns all it touches into gold. (満足は触れるものすべてを金に変える「賢者の石」である)

<断機の戒め>

物事は途中でやめてはなんにもならないといういましめ。「孟母断機の教え」「孟母機を断つ」ともいう。

出典 古列女伝

自分でやろうと始めたことは、途中で辞

めずに最後までやり遂げようと伝えるための諺である。

子どもは直ぐ飽きてしまう。あれをやりたい、これをやりたいと言って、習わせてやると、すぐ「もうやめる」と言う。それで、母親たちは、習い事をさせるのに悩むのだ。だからと言って、習い始めたら絶対やめてはいけないという話にもならない。少なくとも1年は頑張ろうというくらいの話である。1年くらいは続けてみないと、自分に合うか合わないかはわからないし、我慢する、耐える練習にもならないだろう。よほどのことが無い限りは自分で選んだ責任として、1年くらいは頑張っても良いのではないだろうか。

出典説明

後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の「続漢書」からとったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本についての記述がある

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。秀の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経（老子）』二巻を著したという。

古列女伝・・・七巻

中国古代の女性の伝記。撰者は前漢の劉向。古代から漢代までの烈女（節操が固く、気性の激しい女性）を母儀（母の模範）・賢明・仁智・貞順・節義など七目に分類し、各十五人ずつの伝記を記したもの。『列女伝』ともいう。